

ミニ講義「言語研究の面白さ」

東京言語研究所

ガイダンス(2021年4月24日(土))

池上 嘉彦

本日のテーマ:(母語話者が)「(絶対)言わない」というけれど、(実は)言えるし、(然るべき場面になると、現に)使ってしまう言い方—<言語的直観>(linguistic intuition)の変幻自在(?)な、(従って、研究者をも欺き兼ねない)振舞い方—それを身近な例で体験してみる。

〔第1例〕 話者は道に迷っていて、人に尋ねるとき、どういう言い方をするか？

日本語話者:「ここはどこですか」(直訳:“WHERE IS HERE?”)

英語話者:“Where am I?”(直訳:「私ハドコニイマスカ」)

そのような場合、日本語話者にとっては「私ハドコニイマスカ」と言って問うのは、きわめて異様に聞こえるし、英語話者にとっては“WHERE IS HERE?”と言って問うのは、文法的にも変則で意味不明と受けとめられる—互いに相手のする表現は不自然、不適切に感じられる。

とはいえ、日本語話者でも手に地図を持って相手に示しながら道を尋ねる場合には、「私、コノ地図上デ(イマ)ドコニイマスカ」と言って不自然さも不適切さも感じない—英語話者にも“WHERE IS HERE?”を自然な発話としていうことがあるか?—実は、ある!(東京言語研究所2020年度レポート:船田秀佳「英語、中国語、日本語の主観性について」の中で指摘された下記の例—かつて白黒テレビの時代に日本でも放映された「タイムトンネル」と題された映画の英語版とのこと、登場人物のT(トニー)とD(ダグ)は地球からの科学者、Aは宇宙人):

T: Where are we?

A: We need no rooves here. We have achieved perfect climate control.

D: What year are we in? And where is here?

A: A place from which you'll never return.

(ダグの here はすぐ前で宇宙人の使った here に言及したもの。引用符をつけて“here”としてもよいところ、日本語で言えば(お前はいま“here”と言ったが)その“here”とはどこのことなのか—「ココッテ、ドコナンダイ?」といった感じ—そういうことであるならば、実は(然るべき場面になれば)自由に文として産出可能な用法。)

〔第2例〕 日本語文法で「ウナギ文」と称される言い方(例えばレストランで、自分の食べたいと思う料理のことを念頭に、「ぼく(は)、うなぎ(だ)」のような言い方をする場合)は、英語話者はしないという言説—このような言説のあったことを背景に私が<体験>した出来事:

(i) 1987年、私が Longman Research Scholar として University College, London にあった ‘Survey of English Usage’ に関係していた折のこと—ある日このプロジェクトの主任であった Professor Sydney Greenbaum と大学構内の食堂で一緒に昼食した時のこと—二人の注文した料理をウェイトレスが運んできたが、(どちらがどちらの料理を注文したのか思い出せなかったらしく)テーブルの傍らまで来て、何かためらうような動きをする—その瞬間、Prof. Greenbaum(20世紀最高の英文法書と評価された *A Comprehensive Grammar of English* の co-authors の一人)の口から(まったく spontaneously に)発せられたのは “I’m fish” という文であった(!) ... そのあと、私の指摘に対して出てきた Professor Greenbaum の反応はまったく想定外のもの。どうなったのかは時間があればお話しします。

(ii) 1991年、NHK テレビ((当時)第3チャンネル)で放映の「現代ジャーナル・シリーズ日本語(1)-(3)」(『「する」と「なる」の言語学』で取りあげたいいくつかの問題を45分三回のテレビ番組として取りあげたもの)の中で、アメリカ英語と日本語とでほとんどバイリンガルで NHK の翻訳局勤務のアメリカ人女性が述べた<日本人ごっこ>と称する遊び:アメリカの大学で日本語を学んでいた時日本語専攻の学生仲間が集まる—カフェで注文する場面を想定して、一人ずつ、「私ハオレンジ・ジュース」、「私ハトマト・ジュース」というと、「そうは見えないんですけど!」、などと言い合ってよく大笑いした、とのこと。—アメリカ英語話者でも、場合によっては<ウナギ文>を使うということは意識にないかの様子。

言語研究のおもしろさ

池上 嘉彦

0. まえおき(東京言語研究所ホームページに掲載の「2008年度春期特別講座・講義内容「言語学一步手前のことばと言語学を越えたことば」を参照): もともと<他者>なる存在でありながら、高度に<身体化>され、<自動化>され、ほとんど<不可視>の存在になってしまった<母語としての>言語>と(ある時(ふと))その現実気づかせてくれる眼差しを得ること、そして(時には)それを組み替えようとする取り組みに導かれていくこと。

1. <偶然性の中の必然性>を発見すること

九鬼周造(1888-1941: 京都大学教授、哲学、著作:『<いき>の構造』ほか):「簾」—「涎」—「雪崩」.

(1)「澄ム」—「住ム」—「済ム」: 現代日本語では<同音語>という認識 — 古代日本語では同一語「スム」— 共通の<イメージ・スキーマ>に支えられた意味上の関連性 — 英語の'settle the muddy water', 'settle the newly found island', 'settle the problem').

(2) 1976年日本PENクラブ主催「日本文化研究国際会議」でソ連の言語学者の発表:「粥」—「痒い」—「權」に共通のイメージ.

(3)「裂ク」—「割ク」—「咲ク」(cf.「蕾ガ裂ケテ[割ケテ]花ガ咲ク」、「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」(広告:「ホホ、ホンノリソメテ」)),「割ル」—「破ル」—「笑ウ」(cf.「破顔一笑」)—「童」—「おおわらわ(大童)」、「笑(ショウ)」—「咲(ショウ)」(「鳥啼キ、花笑ウ」).

(4)「蛤」(<「浜栗」)、'daisy' (<'day's eye'')

(5)「蜂」、「蝶」—「蛙」、「蛇」—「虹」

(6)「夜(ヨル、ヨ)」:「昼(ヒル、x)」→x=「ヒ」(日)

母語話者として、母語は十分自由に使いこなせるけれども、<説明>することはできない — 「そうになっているから、そうになっているのだ」と<恣意性>としての受けとめ — そのように思えるけれども、「実は、わけがあるのだ」という認識 — 人の「こころ」の働きを垣間見る面白さ.

2. <絶対性の相対化>を認識すること

<ことば>そのものの仕組みに関わる洞察から、<ひと>と<ことば>が直接相互に関わり合う営みについての洞察へ — <好まれる言い回し>を背後で支える<こころ>の働き.

大庭(1988): 話す言語が異なると、同じ<事態>の言語化に際しても話者は異なる<事態把握>をし、それに基づいて異なる言語化の仕方をすることがある — "He was killed in the war" (他動詞の受動態)と「彼ハ戦争デ死ンダ」(自動詞) — それぞれの言語の話者が自らの言語化の仕方を<自然>と思い、相手の言語化の仕方を<不自然>と感じる — 同様の形での対立が<感情の生起

>という事態の言語化に関しては、殆ど体系的に認められる (e.g. 'be disappointed' — 「ガッカリスル」、'be excited' — 「ワクワクスル」、'be satisfied' — 「満足スル」、'be surprised' — 「驚ク」) — 言語化の違いの背後の<事態把握>の仕方の違い：ある<起因>に基づくある<事態>の生起を言語化する際に、(i)生起した<事態>だけに注目して言語化するスタンスと、(ii)<事態>だけでなく、その<起因>をも視野に入れて言語化するスタンスとがある (cf. Bally 1920, 山下 2004) — 英語で<無生>の起因を主語とした使役文、日本語で<有生>の人を主語とした自発文 (人は事態の出来 (しゅったい) する<場>) (Chamberlain (1904)と夏目(1907) — [どこから漂ってきた匂いについて]「コノ匂イハ何ダロウ?」 — "What is that smell?"

言語化に際しての日本語話者における自らの<イマ/ココ>への拘り — 自らの<イマ・ココ>を原点とし、そこに自らの身を置いて (あるいは自らの身を置いているかのようにして) 事態把握をし、言語化する — そのようなスタンスでの言語化の特徴として：

- (i) 自己の<ゼロ化>：「アア、悲シイ!」(?「アア、私ハ悲シイ!」)、「アッ、星ガ見エル」(?「アッ、私ニ星ガ見エル」)、「アッ、風ノ音ガスル」(*「アッ、私ニ風ノ音ガスル」)、「アッ、駅ガドンドン近ツイテクル」(?「アッ、駅ガドンドン私ニ近ツイテクル」)。
- (ii) 自己を<客体>化しない：[自分に語りかける独り言で] "You must work harder!" — 「わたし、もっと頑張らなくちゃ」、[道を尋ねて] "Where am I?" — 「ココハどこデスカ」、[自分以外に誰もいない部屋について] "Es gibt niemand da ausser mir" — 「(ココニハ) 誰モイマセン」
- (iii) <主客合一> (共感による他者への自己投入 — (ii)と同様、<主客対立>を回避)：

・ 川端康成『雪国』の冒頭の文とその英語訳とのずれ：

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」

"The train came out of the long tunnel into the snow country." (E. Seidensticker 訳)

原文では、語り手は汽車の中の主人公の視点で描写 (cf. 「いまは山中、いまは浜、いまは鉄橋渡るぞと...」)。

・ 多田 (1977)、ラガナ (1975)：「このうちに相違ないが、どこからはいいか、勝手口がなかった。」(幸田文『流れる』)の解釈 — 「これでも人間のことばか」という感想。

日本語話者は読者として作品の主人公に容易に自己を合わせての読みができる。

・ "An old pond. A frog jumps in. The sound of water." (「古池や蛙とびこむ水の音」の英訳) — アメリカ人学生の典型的な反応は、"So what?" とのこと。

・ 「海は広いな、大きいな。月がのぼるし、日が沈む。」 — 中国人学生は感動しないとのこと。

・ <歌枕>の魅力

・ <ことば>と<文化>の<相同性> (homology: cf. 「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫通するものは一なり」芭蕉)：加藤 (2007)：「今=ここ」に生きる、「今=ここ」の文化)。

<ことば>と<ところ>の接点に生じる<主客合一>的な事態把握のスタンスと<主客対立>的な事態把握のスタンス — <ひと>における<ことば>と<ところ>の<共進化>の過程でどのように位置づけられるのであろうか。

